

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 —平成 22 年（2010 年）—

境田昌江・山下美恵子*¹・中島節子*²・古家 隆

Summary of the 2010 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture.

Masae SAKAIDA, Mieko YAMASHITA, Setsuko NAKAJIMA,
Takashi FURUIE

Abstract

In the Infectious Disease Surveillance System of Japan, the continuous periodic survey of infectious diseases of Miyazaki prefecture has been carried out since 1999, as being one of the members of that system.

The information of infectious diseases obtained from this system (85 hospitals in the prefecture are included) mentioned above is mainly for pediatric field and has been greatly of use for citizen and medical staff in respect to preventing communicable diseases from spreading in their inhabiting areas or keeping their public health in good shape, by publishing weekly and monthly compendium.

The incidence of infectious diseases assigned by the law of this prefecture, summarized for 2010, has reported this time.

Overall, tuberculosis was found among the people aged from 7 months to 90, but there was higher incidence rate among the elderly, as shown everywhere in the country.

There were great deal of the reports of Infectious gastroenteritis, Influenza, Varicella, Mumps, Respiratory syncytial virus infection infectious disease.

Other infectious diseases of pediatrics and venereal infectious diseases were fewer than ordinary years.

Key words: Infections Disease Surveillance System, Miyazaki, Infectious gastroenteritis, Influenza, Varicella, Respiratory syncytial virus infection, Epidemic keratoconjunctivitis.

はじめに

当所では、平成 11 年より宮崎県感染症情報センターとして、感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、宮崎県における平成 22 年(2010 年)の患者発生状況をまとめたので報告する。

調査方法

1. 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律(以下、感染症法)」で定められた 103 疾患を調査対象とした。

定点医療機関は、感染症発生動向調査事業実施要領に基づき選定した(Table 1)。

*1 非常勤職員 *2 委託職員

2. 調査期間

全数把握対象疾患については平成 22 年 1 月 1 日から 12 月 31 日まで、定点把握対象疾患については平成 22 年 1 週から 52 週まで、インフルエンザについては平成 22/23 年シーズンの平成 22 年 36 週から平成 23 年 20 週までをそれぞれ調査期間とし、いずれの疾患も報告日をもとに集計した。

結果

1. 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症

報告はなかった。

2) 二類感染症

a) 結核 Tuberculosis

報告総数は 197 例で、前年の約 8 割であった。肺結核が 100 例、その他の結核(結核性胸膜炎、腸結核、結核性リンパ節炎等)が 28 例、肺結核及びその他の結核が 2 例、疑似症患者が 23 例、無症状病原体保有者が 44 例であった。宮崎市(65 例)、都城・延岡・日南・日向(各 23 例)保健所からの報告が多かった。男性が 112 例、女性が 85 例で、60 歳以上が 6 割を占めた。

3) 三類感染症

細菌性赤痢 1 例と腸管出血性大腸菌感染症 51 例が報告された。

a) 細菌性赤痢 Bacillary dysentery

報告総数は 1 例で、高鍋保健所からの報告であった。80 歳代の男性で、発熱、下痢、膿粘血便、嘔吐がみられた。原因病原体は FLXNERI (B 群) であった。

b) 腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic *Escherichia coli* infection

報告総数は 51 例で、都城(16 例)、宮崎市(12 例)からの報告が多かった。患者が 26 例、無症状病原体保有者が 25 例であった。O 型別では、O157 が 25 例、O91 が 7 例、O26 が 6 例と多かった。O 型の種類は昨年の 4 種類に比べ 11 種類と多くなった。年齢別では、10 歳未満の報告が約 4 割と多く、発生月では 6~9 月に約 7 割が報告されている

がほぼ年間を通じて報告があった。

4) 四類感染症

E 型肝炎 1 例、A 型肝炎 4 例、つつが虫病 24 例、デング熱 1 例、日本紅斑熱 6 例、マラリア 2 例、レジオネラ症 2 例、レプトスピラ症 3 例が報告された。

a) E 型肝炎 Viral hepatitis E

報告総数は 1 例で、日南保健所からの報告であった。患者は 70 歳代の男性で、黄疸がみられ IgM 抗体が検出された。イノシシ肉からの感染と思われる。

b) A 型肝炎 Viral hepatitis A

報告総数は 4 例で、宮崎市(3 例)、都城(1 例)保健所からの報告であった。全て女性で 30 歳代・60 歳代・80 歳代・90 歳代が各 1 例であった。経口感染が 3 例、不明が 1 例で、全身倦怠感、肝機能異常等がみられ、IgM 抗体が検出された。1 例はインドでの感染と思われる。全国的には昨年の約 3 倍と増加し、注意の喚起がなされた。

c) つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告総数は 24 例で、宮崎市(11 例)、都城(6 例)、小林(5 例)保健所からの報告が多かった。季節的には例年どおり冬季に多発した。男性が 13 例、女性が 11 例で、60 歳代・70 歳代以上が各 10 例と全体の約 8 割を占めた。野外作業中による感染が多く、主な症状として頭痛、発熱、発疹、刺し口などがみられた。痂皮からの病原体検出やペア血清での抗体価の有意な上昇等により確認された。

d) デング熱 Dengue fever

報告総数は 1 例で、宮崎市保健所からの報告であった。フィリピンに渡航歴のある 20 歳代の女性で発熱、全身の筋肉痛、血小板減少、白血球減少がみられた。全国的には昨年の約 3 倍と増加している。

e) 日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告総数は 6 例で、日南(4 例)、宮崎市(2 例)保健所からの報告であった。発生月は 8 月に 3 例、10 月に 2 例、11 月に 1 例であった。男性・女性が各 3 例で、30 歳代と 70 歳代が各 2 例、40 歳代と 60 歳代が各 1 例であった。主な症状として発熱、

刺し口、発疹等がみられた。

f) マラリア Malaria

報告総数は2例で、6年ぶりの報告であった。宮崎市保健所からの報告で四日熱と三日熱であった。いずれも海外での感染で、20歳代の男性であった。主な症状として発熱、悪寒、頭痛等がみられた。

g) レジオネラ症 Legionellosis

報告総数は2例で、宮崎市・都城(各1例)保健所からの報告であった。50歳代の男性と80歳代の女性でいずれも肺炎型であった。主な症状として発熱、咳嗽、呼吸困難、肺炎等がみられた。

h) レプトスピラ症 Leptospirosis

報告総数は3例で、宮崎市保健所からの報告であった。全て男性で、20歳代が2例、70歳代が1例であった。主な症状として発熱、筋肉痛、結膜充血等がみられた。

5) 五類感染症

アメーバ赤痢5例、ウイルス性肝炎9例、急性脳炎7例、クロイツフェルト・ヤコブ病1例、後天性免疫不全症候群4例、梅毒5例、破傷風5例、麻しん1例が報告された。

a) アメーバ赤痢 Amebic dysentery

報告総数は5例で、宮崎市・都城(各2例)、延岡(1例)保健所からの報告であった。腸管アメーバ症が4例、腸管外アメーバ症が1例であった。全て男性で、30歳代・40歳代が各2例、50歳代が1例であった。主な症状として、下痢、発熱等がみられた。海外(タイ、アメリカ)での感染と思われるものが2例であった。

b) ウイルス性肝炎 Viral hepatitis

報告総数は9例で、宮崎市(5例)、日向(2例)、都城・延岡(各1例)保健所からの報告であった。EBウイルスが2例、B型が7例であった。男性が7例、女性が2例で、10歳代・30歳代が各2例、20歳代が3例、40歳代・60歳代が各1例であった。主な症状として、発熱、肝機能異常、全身倦怠感等がみられた。IgM、HBC抗体が検出された。

c) 急性脳炎 Acute encephalitis

報告総数は7例で、宮崎市(4例)、都城(2例)、延岡(1例)保健所からの報告であった。男子4例、

女子3例で、1-4歳が3例、5-9歳が2例、10-14歳が2例であった。発症病原体はロタウイルス、マイコプラズマ、インフルエンザAH1pdmが各1例、不明が4例であった。主な症状として発熱、痙攣、意識障害等がみられた。

d) クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告総数は1例で、古典型クロイツフェルト・ヤコブ病であった。宮崎市保健所からの報告で、60歳代の女性であった。主な症状として、進行性認知症、ミオクローヌス、錐体外路症状等がみられた。

e) 後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告総数は4例で、宮崎市・中央(各2例)保健所からの報告であった。すべて男性で、30歳代が3例、40歳代が1例であった。無症候性キャリア・AIDSが各2例であった。1例は海外(タイ)での感染であった。

f) 梅毒 Syphilis

報告総数は5例で、前年(11例)の約半数であった。宮崎市(3例)、都城・日南(各1例)保健所からの報告であった。男性が3例、女性2例で、20歳代が2例、30歳代・60歳代・80歳代が各1例であった。早期顕症I期が2例、無症状病原体保有者が3例であった。

g) 破傷風 Tetanus

報告総数は5例で、宮崎市(3例)、都城・中央(各1例)保健所からの報告であった。男性2例、女性3例で、60歳代が3例、20歳代・30歳代が各1例であった。創傷部からの感染と思われるものが3例であった。

h) 麻しん Measles

報告総数は1例で、日南保健所からの報告であった。10歳代の男子で、臨床診断例で発熱、咳、発疹がみられた。ワクチン接種歴1回あり。

2. 定点把握対症疾患の発生状況

1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は53,420人(定点あたり1429.5)で、前年の76%、例年の89%と減少したが、全国の167%と多かった。

前年との比較では、手足口病が2.4倍、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症が1.9~1.7倍、咽頭結膜熱、感染性胃腸炎、伝染性紅斑、ヘルパンギーナが1.4~1.2倍と多く、水痘、突発性発疹がほぼ同じ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、インフルエンザが約8割、百日咳が約1割と少なかった。

例年との比較では、RSウイルス感染症が2.3倍、手足口病、流行性耳下腺炎、水痘、感染性胃腸炎、インフルエンザが1.6倍~1.2倍と多く、突発性発疹、伝染性紅斑、咽頭結膜熱がほぼ同数、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が7~8割、百日咳が4割と少なかった。

全国との比較では、手足口病、水痘、突発性発疹、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱が2.1~1.8倍、感染性胃腸炎、インフルエンザ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が1.6~1.2倍と多く、ヘルパンギーナがほぼ同数、伝染性紅斑、百日咳が6~7割であった。

各疾患の発生状況の概要をTable2に、経時的発生状況をFig.1に示した。その概略は以下のとおりであった。

a) インフルエンザ Influenza

2010/2011年シーズンの報告総数は、25,147人(定点あたり426.2)で、前シーズンの約8割であったが、例年の約1.2倍、全国の約1.6倍と多かった。2011年第2週(24.1)に流行発生注意報が発令され、翌週の第3週(64.5)には流行警報が発令された。第3週(1月中旬)のピークの後、第9週(3月上旬)には定点あたり5.7まで減少したが、再び増加し始め、第13週(3月下旬)に定点あたり26.4と第2の小ピークができた。流行の立ち上がりはほぼ例年通りであったが、終息の時期は例年よりも遅くなった。保健所別では延岡(593.6)、中央(490.0)、宮崎市(462.7)、都城(424.1)保健所からの報告が多く、0-5歳が34%、6-9歳が30%、10-14歳が19%を占めた。

b) RSウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は2,727人(定点あたり75.8)で、前年の1.7倍、例年の2.3倍と多かった。保健所別では、延岡(229.8)、日向(144.5)、高鍋(98.8)保健所からの報告が多く、年齢別では1歳が最も

多く全体の約4割、2歳以下で約9割を占めた。

c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は921人(定点あたり25.6)で、前年の1.4倍、例年の9割、全国の1.8倍であった。日南(100.3)、延岡(35.5)、都城(32.0)保健所からの報告が多く、1歳が最も多く全体の約3割、6ヶ月から3歳で約7割を占めた。

d) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は2,836人(定点あたり78.8)で、前年の8割、例年の7割、全国の1.2倍であった。延岡(237.0)、中央(100.0)、日南(88.0)保健所からの報告が多く、3歳から6歳で全体の約6割を占めた。

e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は23,965人(定点あたり665.7)で、前年の1.4倍、例年の1.2倍、全国の1.6倍であった。小林(1120.7)、中央(952.0)、日南(891.3)保健所からの報告が多かった。1歳から4歳で全体の約半数を占めた。

f) 水痘 Varicella

報告総数は5,707人(定点あたり158.5)で、前年の1.1倍、例年の1.2倍、全国の2.1倍と多かった。延岡(227.8)、都城(186.0)、宮崎市(166.8)保健所からの報告が多かった。1歳から4歳で約7割を占めた。

g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は3,732人(定点あたり103.7)で、前年の2.4倍、例年の1.6倍、全国の2.1倍と多かった。保健所別では、日南(200.3)、都城(123.2)、日向(121.0)保健所からの報告が多く、1歳から3歳で全体の約7割を占めた。6月初旬には流行警報が発令された。

h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は420人(定点あたり11.7)で、前年の1.4倍、例年の約9割、全国の7割であった。例年の流行パターンとは違い冬季に患者数が増え、12月下旬に年間のピークを迎えた。都城(32.3)、中央(24.0)、小林(17.3)保健所からの報告が多く、4歳から7歳で全体の約半数を占めた。

i) 突発性発疹 Exanthem subitum

報告総数は2,159人(定点あたり60.0)で、前年

及び例年とほぼ同数、全国の2倍であった。延岡(87.3)、宮崎市(66.6)、日南(65.3)、都城(62.3)保健所からの報告が多かった。6ヵ月から1歳で全体の約9割を占めた。

j) 百日咳 Pertussis

報告総数は40人(定点あたり1.1)で、前年の1割、例年の4割、全国の6割と少なかった。延岡(7.8)保健所からの報告が多く、10歳未満が全体の約7割を占めた。

k) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は1,893人(定点あたり52.6)で、前年の1.2倍、例年の約8割、全国の1.1倍であった。延岡(101.5)、日南(94.0)、中央(78.0)、日向(70.0)保健所からの報告が多く、1歳が最も多く全体の約3割、6ヵ月から3歳で約8割を占めた。

l) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は3,997人(定点あたり111.0)で、前年の1.9倍、例年の1.5倍、全国の1.9倍と多かった。保健所別では、日向(349.3)、延岡(311.8)保健所からの報告が多く、2歳から6歳で全体の約7割を占めた。

2) 眼科及び基幹定点報告疾患

眼科対象疾患は流行性角結膜炎のみで、報告総数は968人(定点あたり161.3)で、前年の194%、例年の134%、全国の488%といずれも多かった。

基幹定点把握対象疾患の報告総数は29人(定点あたり4.1)で、前年の48%、例年の36%、全国の15%と少なかった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告はなかった。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は968人(定点あたり161.3)で、前年の2倍、例年の1.4倍、全国の5倍と多かった。宮崎市(257.0)保健所からの報告が多く、10歳未満が約3割、20歳代と30歳代で約4割を占めた。9月初旬に流行警報が発令された。

c) 細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis

報告総数は4人(定点あたり0.6)で、前年の半数、例年の4割、全国の半数と少なかった。宮崎

市(3.0)、延岡(1.0)保健所からの報告で、0歳が3人、10-14歳が1人であった。

d) 無菌性髄膜炎 Aseptic meningitis

報告総数は13人(定点あたり1.9)で、前年及び全国の1.1倍、例年の半数であった。日南(5.0)、宮崎市・延岡(各4.0)保健所からの報告で、5-9歳が5人と最も多く、0歳が4人、1-4歳が3人、10-14歳が1人であった。

e) マイコプラズマ肺炎 Mycoplasmal pneumonia

報告総数は5人(定点あたり0.7)で、前年の約2割、例年の1割、全国の約3割であった。延岡(3.0)、宮崎市・高鍋(各1.0)保健所からの報告で、1-4歳が2人、10-14歳が2人、30歳代が1人であった。

f) クラミジア肺炎 Chlamydial pneumonia

報告総数は7人(定点あたり1.0)で、前年の8割、例年の1.4倍、全国の7割であった。高鍋(7.0)保健所からの報告で、1-4歳が3人、0歳、5-9歳がそれぞれ1人、60歳以上が2人であった。

3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は571人(定点あたり43.9)で、前年の109%、例年の75%、全国の85%であった。淋菌感染症、尖形コンジローマが前年の1.3倍~1.2倍と多かったが、他は前年、例年及び全国ともほぼ同じか6~9割と少なかった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は446人(定点あたり63.7)で、前年の88%、例年及び全国とはほぼ同じであった。

a) 性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は324人(定点あたり24.9)で、前年とほぼ同数、例年の8割、全国の9割であった。都城(41.5)、日向(41.0)、宮崎市(31.0)保健所からの報告が多かった。男女ほぼ同数で、20歳代が全体の約半数を占めた。

b) 性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpetic infection

報告総数は78人(定点あたり6.0)で、前年の1.1倍、例年の8割、全国の7割であった。日向(11.0)、宮崎市(10.3)、高鍋(9.5)保健所からの報告が多かった。男性が約3割、女性が約7割で、30歳代が

全体の約3割, 20歳代が約2割を占めた.

c) 尖圭コンジローマ *Condyloma acuminatum*

報告総数は40人(定点あたり3.1)で, 前年の1.2倍, 例年の9割, 全国の6割であった. 宮崎市(6.0), 高鍋(4.5)保健所からの報告が多かった. 男性が約6割, 女性が約4割で, 20歳代が全体の約4割, 40歳代が約3割を占めた.

d) 淋菌感染症 *Gonorrhea*

報告総数は129人(定点あたり9.9)で, 前年の1.3倍, 例年の7割, 全国の9割であった. 都城(23.5), 日南(19.0)保健所からの報告が多かった. 男性が9割, 女性が1割で, 20歳代が全体の約半数を占めた.

e) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant Staphylococcus aureus infection

報告総数は303人(定点あたり43.3)で, 前年, 例年, 全国の9割であった. 宮崎市(89.0), 延岡・日南(各53.0)保健所からの報告が多く, 70歳以上が全体の約7割を占めた.

f) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

Penicillin-resistant Streptococcus pneumoniae infection

報告総数は141人(定点あたり20.1)で, 前年の9割, 例年の1.7倍, 全国の1.6倍であった. 宮崎市(109.0), 高鍋(13.0), 延岡(10.0), 日南(9.0)保健所からの報告で, 4歳以下が全体の約7割を占めた.

g) 薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant Pseudomonas aeruginosa infection

報告総数は2人(定点あたり0.29)で, 前年の2倍, 例年の2割, 全国の3割であった. 宮崎市・延岡(各1.0)保健所からの報告で, 40歳代と70歳以上の報告であった.

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち, 結核は県内全域で7ヶ月から90歳代まで幅広い年齢層で報告されたが, 高齢者の発症数が約6割と多かった.

5類感染症のうち, 定点把握疾患のインフルエンザと小児科対象疾患の報告総数は, 前年の76%, 例年の89%と減少したが, 全国の167%と多かった.

疾患別にみると感染性胃腸炎, インフルエンザ, 水痘, 流行性耳下腺炎, RSウイルス感染症の報告が非常に多く, 流行の年であった.

また, 咽頭結膜熱, RSウイルス感染症, 手足口病, 流行性耳下腺炎は, 特定地域に偏って大きな流行が発生しており, 感染症の流行に地域差が見られた.

眼科疾患の流行性角結膜炎は, 前年の194%, 例年の134%, 全国の488%と非常に多い状況である.

性感染症の報告総数は, 前年の109%, 例年の75%, 全国の85%と少なかった. 年齢別では, 20歳代前半から30歳代の報告が多くなっている.

今年の調査結果から, 流行発生時期のずれや, 他の地域と異なる流行状況を示す疾患があることも確認され, 地域的な発生動向調査の重要性が示された. 今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに, 適切な情報の提供と感染予防への啓発は若年齢層から行っていく必要がある.

備考)

感染症発生動向調査事業は, 患者情報と病原体情報から構成されており, 当所においては後者は微生物部において情報が得られている.

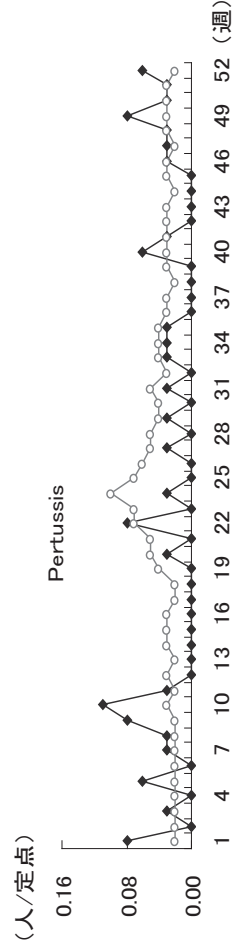
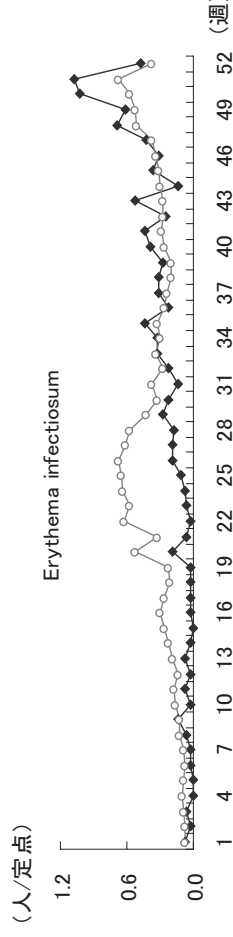
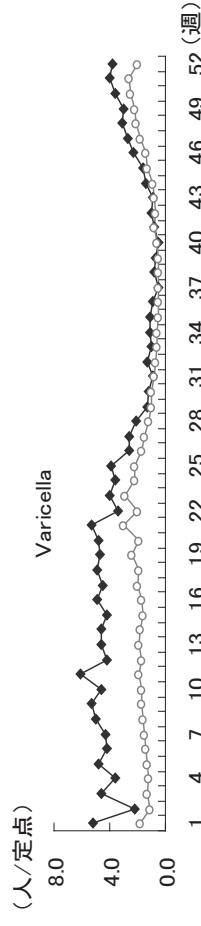
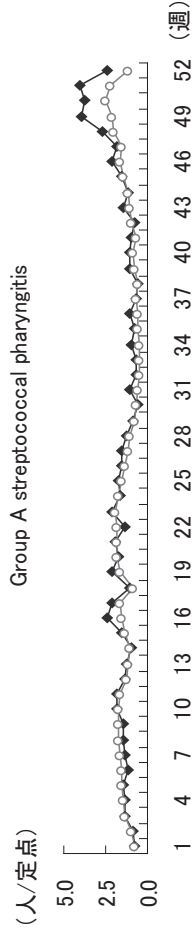
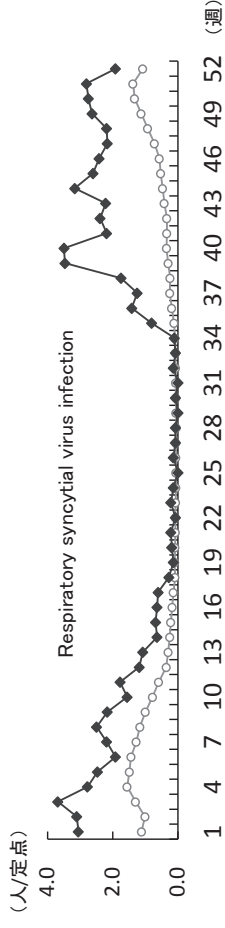
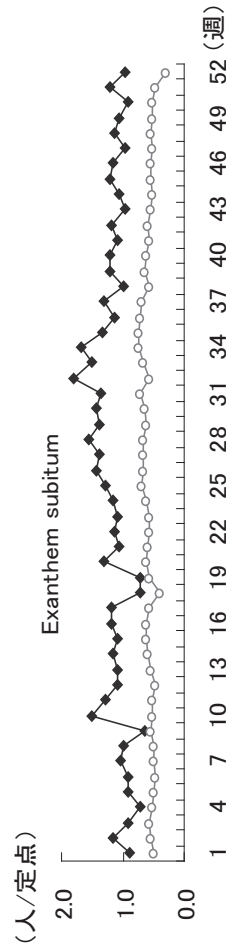
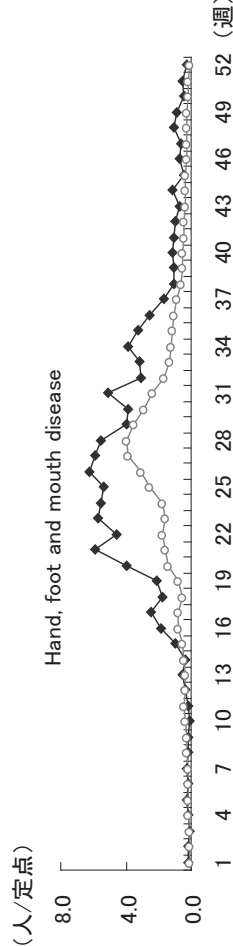
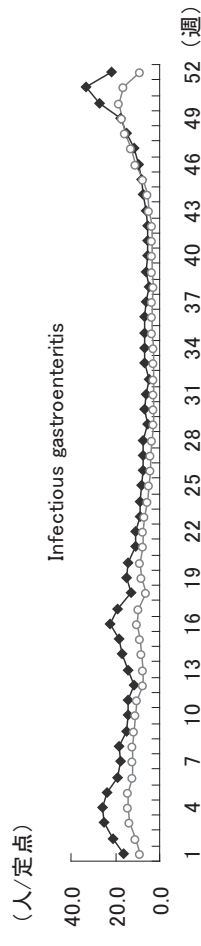
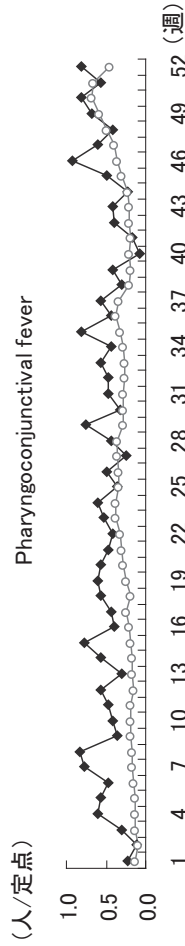
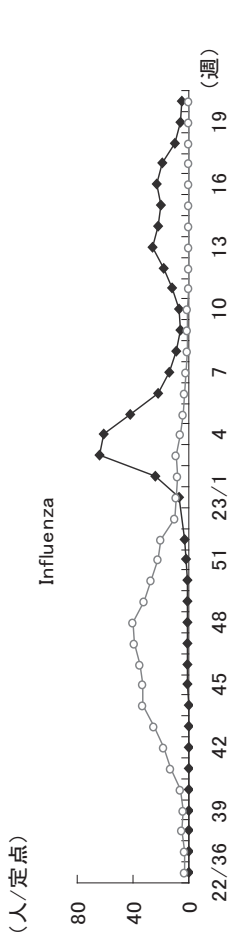
Table 1 The number of the sentinel clinics and hospitals by the health center

Health center	Number of the sentinel clinics and hospitals				
	Influenza disease	Pediatric diseases	Ophthalmic diseases	Diseases reported from specially-designated sentinel clinics	Sexually-transmitted
					disease
Miyazaki-city	16	10	3	1	4
Miyakonojo	10	6	2	1	2
Nobeoka	7	4	1	1	2
Nichinan	5	3		1	1
Kobayashi	5	3		1	1
Takanabe	6	4		1	2
Takachiho	2	1			
Hyuga	6	4		1	1
Chuo	2	1			
total	59	36	6	7	13

Table 2 Summary of incidence of the category V diseases in Miyazaki prefecture.

Disease name	Number of the reports	Number of the reports per a sentinel	Age distribution		The ratio against Miyazaki (2009) (%)	The ratio with average of the past five years (%)	The ratio against Japan (2010) (%)
			Major age group	Ratio※ (%)			
Influenza	25147	426.2	<10	64	75	114	157
Respiratory syncytial virus infection	2727	75.8	≤2	88	174	232	-
Pharyngoconjunctival fever	921	25.6	6M-3	71	141	86	178
Group A streptococcal pharyngitis	2836	78.8	3-6	55	76	73	118
Infectious gastroenteritis	23965	665.7	1-3	41	140	115	163
Varicella	5707	158.5	1-4	73	112	118	205
Hand, foot and mouth disease	3732	103.7	1-3	73	238	156	208
Erythema infectiosum	420	11.7	4-7	54	139	87	71
Exanthem subitum	2159	60.0	6M-1	93	105	99	201
Pertussis	40	1.1	<10	73	10	37	62
Herpangina	1893	52.6	6M-3	81	115	79	114
Mumps	3997	111.0	2-6	72	188	150	187
Acute hemorrhagic conjunctivitis	0	0.0	-	-	-	-	-
Epidemic keratoconjunctivitis	968	161.3	<10	25	195	136	502
Bacterial meningitis	4	0.6	≥0	75	50	38	54
Aseptic meningitis	13	0.9	<10	92	108	51	106
Mycoplasmal pneumonia	5	0.7	1-4&10-14	40	16	12	3
Chlamydial pneumonia	7	1.0	1-4	43	78	135	65
Genital chlamydial infection	324	24.9	20's-30's	70	102	77	92
Genital herpetic infection	78	6.0	20's-30's	58	108	75	69
Condyloma acuminatum	40	3.1	20's	38	117	93	56
			40's	28			
Gonorrhea	129	9.9	20's-30's	67	126	69	93
Methicillin-resistant <i>Staphylococcus aureus</i> infection	303	43.3	≥70	69	87	87	85
Penicillin-resistant <i>Streptococcus pneumoniae</i> infection	141	20.1	≤4	70	90	167	164
Multidrug-resistant <i>Pseudomonas aeruginosa</i> infection	2	0.3	45-49&≥70	50	200	24	28

※ Ratio for the number of all report.



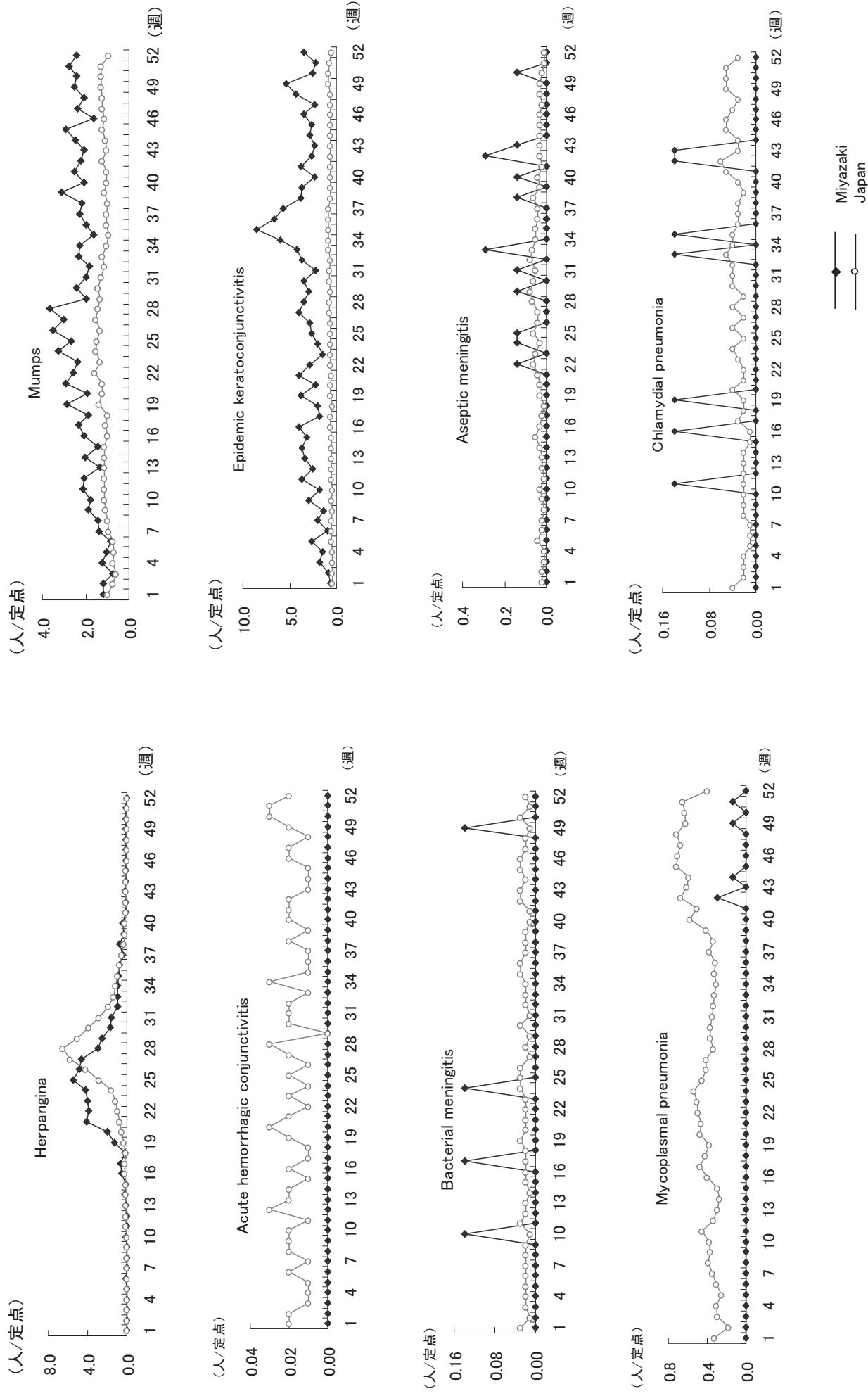


Fig.1 Weekly report of category V Influenza , Pediatrics diseases and Diseases reported from specially-designated sentinel clinics .